
虹色カタツムリ

まいまい?

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虹色カタツムリ

【コード】

N3525H

【作者名】

まいまい？

【あらすじ】

明けない梅雨、夏の精霊が目覚めない夏。しゃべるカタツムリと、少年の話。

水たまりを覗いてごらん？

雨の中に、揺れる水たまりを覗いてみれば、何が見えるだろう？

波紋に浮かぶアジサイの花びら？

流れ行く鉛色の空？

道の流れていく、傘の群れ。

その町に咲く傘は、道の流れていく。

湿った大気の色に染まり、ただただ、流れていく。

水たまりに映る風景に足を止め、心を動かす者はいなかった。

あまりにもありふれた、雨の日の垂れ込める風景には。

雨に湿った灰の空気は、ほのかに、紫陽花あじさいの香りがする。

その青紫に染まった花びらを、すっかり地に散らしてしまった紫陽花は、

カタツムリを乗せつつ、雨に打たれている。

雨の多い夏、長い梅雨の夏だった。

もう、7月も終わろうとしているのに、空が灰色以外の日を数えたほうが早い。

夏の日差しは、厚い雲の上に。

梅雨はカタツムリが渦巻殻に背負ってくる。

雨の中、一人歩く少年は、そう、聞いた事があった。
少年の名は、竜胆^{りんとん}。

黄色の雨具一式を身にまとい、手のひらには、カタツムリを乗せている。

首からは下げているラジオからは、先ほどから音楽が流れている。梅雨の気配とは不釣り合いなリズムは、湿気を吹き飛ばそうという意図があるらしい。

「その音楽は、絶対にセンスない」

口を開いたのは、竜胆ではなくカタツムリであった。
竜胆はラジオの音を小さくした。

このカタツムリは、人の言葉を話すのだ。

「ここらへんにあるはず」

カタツムリは、ある水たまりを探していた。
水溜りに住むという蟬の脱殻が欲しいらしい。

しかし、カタツムリの足は鈍い。

そこで、前を通る人々に呼びかけていたのだが、竜胆を除いて足を止める物はいなかった。

カタツムリと竜胆の二人は、こうして出会ったのだ。

「少年。早速、水溜りを覗いてみる」

竜胆の手のひらに載ったカタツムリは、触角を使って指し示した。
竜胆は言われるがままに、水溜りを覗いた。

水溜りに映るのは何だろうか？

映っていたのは、灰色の空でもなく、自分の顔でもなかった。

そこは夜空が広がっていたのだ。

「あれ？」

竜胆は思わずカタツムリを見た。

「何で、ここだけ夜が映っているの？」

カタツムリに表情は無いのかもしれないが、竜胆には、ニヤリ、と笑った、ように見えた。

「早く行く」

カタツムリは、水溜りに飛び込んだ。

水面には波紋ができ、飛び込んだカタツムリはすぐに見えなくなつた。

「早く来る」水溜りの中から、声だけが聞こえる。

戸惑う竜胆に、カタツムリは言う。

「大丈夫、溺れはしない。今は、扉が完全に開いているから」

竜胆も続いて用心しながら慎重に、足を入れる。

竜胆の足は底につかない。

思ったよりも深いようだ。

「もっと、思いっきり、飛び込む」

竜胆は、目を瞑り、両足を揃えて水溜りに飛び込んだ。

長靴やズボンが濡れてしまふ、と竜胆が思った瞬間、世界は、揺らめき、泡の中に溶けていった。

頭上には、銀色の流れ。

それは、泡とは違う、光のきらめき。

空は、天の河は、北の上空から、南の上空へと流れていた。

水溜りの中は、夜であった。

「ここは？」

先ほどいた場所とは、違うようだ。

それどころか、アスファルトの道さえない。

街燈の光かと思ったその淡い明るさは、月の光。

白い月に照らされた夜は、人の声は、聞こえない。

雲ひとつ無い空は、水溜りのように静かに、揺れている。

「あつちに行く」

カタツムリは、竜胆の足元で、そう叫ぶ。

竜胆は、カタツムリを拾い上げ、雑木林の方へ歩き出した。

闇に包まれた林は、靈気のような物が、漂っていた。

草草が月に照らされ、発光植物のように黄緑色を発し、ぼつと

浮き出て見えた。

風が、吹いた。

竜胆は、目を細める。

「竜胆、あそこ！」

カタツムリは、興奮していた。

「なに？」

カタツムリは、地面を見た。

竜胆も、つられて、下を見た。

土が動いていた。

さらに土が盛り上がる。

「あっ！ 蝉の幼虫」

竜胆は、言う。

蝉は、地面を這う。

そして、木に登る。

足を止めると、日本の茶色の鎌を、樹に食い込ませ、体を固定する。

鱗甲色に耀く背中にひびが縦に入る。

割れ目から、白い体が徐々に見え始めた。

何分も何分もかけて体を殻の外に出していく。

宝石のように透き通った雪色の蝉。

身体が全て抜けた蝉は、自分の殻にしがみついた。

しわしわの羽が、シャンとしてくる。

その羽は、鏡のように周りの風景を反射させていた。

> i 2 1 4 0 — 3 1 2 <

そして、生まれたばかりの蝉は、大空へと飛び立った。

「綺麗」

「そうだね」

「……今日から、うるさく鳴く大人の仲間入り」

誉めているのか、怒っているのかわからない言葉を言う。

夏の終わりまで、長生きしろよ。夏は、本当に短いからな、本当に、

誰にもわからないように、カタツムリは、囁いた。

カタツムリは、竜胆のほうを見た。

「蝉の子供は、自分の脱殻を見たとき、大人になる」

「そうだね」

「自分は、まだ、自分の脱殻を見ていない。ただ、大人になろうと

背伸びしていた幼虫」

「？」

「外の世界がうらやましくて出てきた、まだ成長していない子供。土の中にいる、太陽の光の下で鳴く日を夢見ている子供」

「……」

竜胆は、首をかしげた。

「自分は本来いるべきところに帰らなくてはいけない。ここにいるべきじゃない」

「？」

「竜胆、抜け殻を」

竜胆は、そういわれ、カタツムリに、蟬の脱殻を手渡す。

「これは、夏の精霊の抜け殻。

草花から滴る甘い朝露の、白い真昼の太陽光の、そびえたつ夕立の雲の、輝くモノたちから生まれた、夏色の結晶」

カタツムリの殻が虹色に染まる。

カタツムリの体が、淡い光に包まれていく。

「！」

竜胆が叫ぶと、カタツムリの身体は、空気に浮かぶ。涼しく軽い風が吹いた。

「……長い雨も、そろそろ終わりだ……」

心の奥に、そう聞こえたような気がした。

カタツムリは空へと。

カタツムリの通った跡は、虹となる。

「紫水晶のような日光が、差し込む。
風景の溶解。」

竜胆が気がつくのと、先ほどの水溜りを覗いてた。
カタツムリは、もう、そこにはいなかった。

水溜りに映る空が明るくなる。
首から下げたラジオの音楽は終わり、天気予報の時間となる。

” 午後の天気予報の時間です。

…停滞していた梅雨前線は明日にも……、梅雨明けとなるでしょ。
う。”

雨の残した水溜りを覗いてごらん。

揺れる水面に映るのは、何だと思う？

自分の姿？

それとも、別世界？

あの空に残る、虹のような。

明けた空気の中に、

そっと、

あるような、

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3525h/>

虹色カタツムリ

2011年11月16日13時33分発行